

# 『梅松論』における「異朝」

——『太平記』との比較を通じて——

一 はじめに

北 村 昌 幸

元弘元年（一三三二）倒幕を企てて挫折した後醍醐天皇は、かつての後鳥羽院のように、隠岐の島で流謫の日々を送ることとなった。しかし、後鳥羽がかの地で崩じたのに対し、後醍醐は都への帰還を果たしている。一度は大敗して苦汁を嘗めた帝王が鮮やかに返り咲いたという事実は、当時の人々にとって瞠目の的であったろう。それが話題にのぼる際、往々にして想起されたのは、古代中国の越王勾踐の物語であったに違いない。会稽山で呉王の軍門に降りながら、後日その雪辱をなし遂げた勾踐の故事は、まさしく後醍醐と結びつくものだからである<sup>(1)</sup>。例えば、『太平記』は巻四に長々と呉越合戦説話を引用して、両者の相似を熱心に説いている。還幸時ではなく護送時の叙述の中に当該説話を位置づけたのは、後醍醐再起の予言として読まれることを期待したうえでの構成とみてよい。予兆や未来記を好んで語る『太平記』らしい叙述方法の一例といえよう。

同じく、後醍醐と勾踐とを対置して語るのが『梅松論』である。『太平記』とは異なり、後醍醐の隠岐脱出後の叙述の中に当該故事を位置づけており、予言ならぬ論評のための引用となっている。また、百字に満たない分量である

ことも、大きな相違点として挙げられよう。だが、注意を要するのはむしろ、呉越合戦に言及するときの素っ気ない態度の方であると思う。実際のところ、『梅松論』全体を見渡すと、中国故事との類比を行うことに對して、必ずしも積極的ではないことに気づかされる。それは引用頻度だけの問題ではない。後述するように、中国故事の扱い方そのものが『太平記』とは一線を画しているのである。

では、ともに元弘建武の内乱を描く作品であるにもかかわらず、両者のあいだに故事引用態度の差異が見られることを、どのように理解すればよいのだろうか。以下、『梅松論』を主軸としながら、その歴史叙述のあり方について考察を加えることにしたい。

## 二 呉越合戦説話の比較

まずは先行研究に導かれながら、『太平記』卷四「備後三郎高德事付呉越事」における呉越合戦説話の引用のあり方を確認する。契機となるのは、囚われの後醍醐にあてて児島高德が桜の木に書き残した、「天莫<sup>レ</sup>冗<sup>二</sup>勾<sup>一</sup>踐<sup>二</sup>」<sup>トクツラニスルコト</sup>。神宮徴古時非<sup>レ</sup>無<sup>二</sup>范<sup>一</sup>蠡<sup>二</sup>」<sup>ユス</sup>という詩句である。この詩を解説するという体裁で、『太平記』は呉越合戦を語り始める。神宮徴古館本から引用しよう<sup>(2)</sup>。以下、『太平記』の引用はすべてこれに拠る。

御警固の武士共朝にこれを見付て、何事ぞ何なる者か書たるらむとて、読煩て即上聞に達してけり。主上は頓て詩意を御覚ありて龍顔殊に御快く打笑せ給へども、武士共は敢て其来歴を知らざれば思崇<sup>トホク</sup>る事も無かりけり。

抑此詩の意は、異国に呉越とて双べる二の国あり。此両国の諸侯、みな王道を不行して覇業<sup>ツトキ</sup>を為<sup>レ</sup>ける間、呉は越をうちて取むとし、越は呉をほろぼして并むとす。……

護送される憂き目にあつていた後醍醐は、自分が《再起する王<sup>レ</sup>勾踐》になぞらえられたことを喜んでゐる。あら

はじめ後醍醐による是認をまとったうえで展開していく当該故事は、作品世界の中で確かな意義を獲得しており、二人の王の運命が共鳴するものであることを享受者に強く訴えかけてくるだろう。本朝内乱史と中国故事との共鳴をこのように演出するのが、引用を行うにあたっての『太平記』の基本姿勢であった。呉越合戦説話の場合、それが後醍醐復権の予言に発展するものであることは言うまでもあるまい。

ところで、相似関係を呈するのは二人の王だけではない。勾踐の傍らに范蠡がいたように、後醍醐のもとにも有能な忠臣がいたからこそ、「時非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>范蠡」という句が添えられるわけである。その忠臣とは、もちろん児島高德自身である。彼は范蠡と同じく智慮ある人物として形象されている<sup>(3)</sup>。警固の武士たちには理解できない詩をもつて、天皇だけに真意を伝えようとした高德の機転は、魚腹に密書を忍ばせて勾踐に送った范蠡の故事を彷彿とさせる。

身をやつし形をかへて、簪<sub>アツカ</sub>に魚をいれて自これを荷ひ、魚をうる商人の学をして呉国えぞ行たりける。姑蘇城の辺に徘徊<sub>ウツク</sub>て勾踐の御坐する所を問ければ、或人委く教知せてけり。范蠡嬉く思て彼獄<sub>ヒトヤ</sub>の辺へ行たりけれども、禁門の警固無間かりければ、一行の書を魚の腹中におさめて、獄中えぞ投入ける。勾踐これを恠く欲て、魚の腹をあけて見たまへば、

西<sub>ウハク</sub>伯<sub>ハレ</sub>囚<sub>ヨウリ</sub> 扁<sub>ヒ</sub>里<sub>リ</sub>、重<sub>ハ</sub>耳<sub>ミ</sub>走<sub>シ</sub>翟<sub>シ</sub> 皆<sub>タラ</sub>以<sub>テ</sub>爲<sub>ス</sub>三<sub>サン</sub>王<sub>ワ</sub>覇<sub>ハ</sub>、莫<sub>ナシ</sub>死<sub>シ</sub>許<sub>コ</sub>敵<sub>ト</sub>

とぞ書たりける。筆勢文体更に可惑<sub>アツカ</sub>もなし、范蠡が仕業<sub>シヤク</sub>なりと見給ければ、

右の記事は『史記』『越王句踐世家』や『呉越春秋』には見えず、日本で作られた逸話であると考えられている<sup>(4)</sup>。古活字本『平治物語』や『曾我物語』、『三国伝記』にも引かれているが、それらは『太平記』をもとに書かれたものとおぼしい<sup>(5)</sup>。他方、東京大学国語研究室所蔵の『和漢朗詠集注』（高野辰之氏旧蔵）には次のような記述がある<sup>(6)</sup>。

匡房注ニハ、ハンレイ商人<sub>シヤク</sub>ヲ憑<sub>モ</sub>テ魚ノ腹ニ文ヲ入テ越王ノ方ヘヤリテ令<sub>セ</sub>見<sub>ミ</sub>、文章ニハ呉王ニ降<sub>ク</sub>テ越ノ国ヘ販<sub>ル</sub>リ玉ヘト文ヲヤリケレバ、(下巻、雲、「漢皓秦を避し朝」の注)

この「匡房注二八」には信憑性がないたため、魚腹密書説がいつ頃生じたのか、現時点では明らかにし得ない<sup>(7)</sup>。いずれにせよ、范蠡が商人を頼ったという点や、密書の内容が詩句ではないという点など、独自の記述を有していることは注目に値する。『太平記』成立以前に巷間に広まっていた説であるか否かは不明だが、仮に広まっていたとするならば、『太平記』はわざわざ密書の文面を詩句に構成し直したということになるだろう<sup>(8)</sup>。実際のところ、詩句という形式が選ばれたのは、高徳の詩との近似性を印象づけるためだったと考えられる。もとより『太平記』は、本朝内乱史と中国故事とを緊密に結びつけるべく、さまざまな工夫を凝らしている。中国故事の中身を本朝内乱史に近づけることもあれば、逆に、本朝内乱史を中国故事に合わせて作り変えることもあった。例えば、驪姫に准后廉子の「殊艶尤態」「善巧便佞」のイメージを色濃く投影したり（巻十二）、護良親王に眉間尺と同じく剣先を喰い切らせたりしているのである（巻十三）。異国と本朝とを繋ぐ意識は、ときに記事の捏造をも許してしまうほど、『太平記』の中で強く作用していたようだ。とりわけ、いま問題にしている高徳と范蠡の智謀については、どちらも創作と考えられ、その意味でいつそう手が込んでいる。

なお、『史記』にはないエピソードといえば、西施の登場も見逃せない。当該説話の興趣を高めるための起用であるろうが、呉王に奪われてしまう彼女が、勾踐にとつて単なる愛妾ではなく后であるという点には、少しく注意が必要かと思う<sup>(9)</sup>。なぜなら、後醍醐もまた中宮との悲しい別れを強いられており、作中では説話引用に先立って、そのことが叙情的に語られているからである。后との仲を引き裂かれるという運命も、二人の王を繋ぐ要素となり得ているのではないだろうか。

他方、『史記』にあるエピソードが削られることもある。なかでも注目されるのは、越国が勝利した後に功臣大夫種を襲った悲劇である。『史記』「越王句踐世家」の本文を掲げておく<sup>(10)</sup>。

范蠡遂去、自<sub>レ</sub>齊遺<sub>二</sub>大夫種書<sub>一</sub>曰、「蜚鳥<sub>二</sub>良弓藏、狡兔<sub>レ</sub>死走狗烹<sub>一</sub>。越王<sub>レ</sub>為人、長頸鳥喙。可<sub>二</sub>与<sub>レ</sub>共患難、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>与<sub>レ</sub>共樂<sub>一</sub>。子<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>去」。種見<sub>レ</sub>書、称<sub>レ</sub>病不<sub>レ</sub>朝。人或<sub>レ</sub>讒、「種且<sub>レ</sub>作乱」。越王<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>種劍<sub>一</sub>曰、「子<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>寡人伐<sub>レ</sub>吳七術。寡人用<sub>レ</sub>其<sub>二</sub>三而敗<sub>レ</sub>吳。其<sub>二</sub>四在<sub>レ</sub>子<sub>一</sub>。子<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>我從<sub>レ</sub>先王<sub>レ</sub>試<sub>レ</sub>之」。種遂<sub>レ</sub>自殺<sub>一</sub>。（返り点、原文ママ）

じつは范蠡は主君勾踐を全面的には信用していなかったという。だからこそ、戦乱が終結するや、身に災いが降りかかるのを恐れて齊に奔ってしまうのである。一方、越に留まった大夫種は、叛意を疑われて死を賜ることとなる。讒言を信じやすい勾踐の愚かさが実証された形である。こういったマイナスイメージの勾踐像は日本の文献にも見えており、例えば、『和漢朗詠集永濟注』下巻、雲、「漢皓秦を避し朝」の注には、

越王ヲシミテ、ユルシタマハザリケレドモ、（范蠡は）「君ニ項長鳥口ノ相イマス。コレ賢人ヲ害スル相也」トイヒテ、ヒソカニ妻子ヲヒキキテ、フネ一艘ニノリテ、五湖トイフミヅウミニウカビテ、サリケレバ、（中略）勾踐ハ、ノチニ、ツヒニ、呉ノタメニウタレニケリ。

とある<sup>(11)</sup>。「賢人ヲ害スル」愚かな王が再び呉に滅ぼされてしまったという創作記述は、前掲『史記』の醸し出すマイナスイメージをさらに膨らませたものと考えられる。ところが、『太平記』の勾踐像にはその片鱗すら窺えない。范蠡が禄を受け取らずに宮廷を退いたのは、主君の短所を危ぶんだからではなく、あくまでも「功なり名とげて身退は天道なり」という無欲さ<sup>(12)</sup>ゆえとされる。大夫種の讒死についても一切触れられていない。結果的に勾踐は最後まで『正しき王』であり続けるのである。『史記』を読んでもいけば当然知っているはずの「狡兔死して走狗烹らる」という逸話を、『太平記』が採らなかつたのは、おそらくこの『正しき王』としての人物形象にこだわっていたからだろう<sup>(13)</sup>。後醍醐のアナロジーたる越王勾踐像には幾重にも作為が施されている。鬱屈から喜悦へと至る後醍醐の物語は、周到に準備された故事との響き合いを通じて、いよいよ強い輝きを放つこととなる<sup>(14)</sup>。

では続いて、『梅松論』の呉越合戦記事を見てみよう。前述のとおり、後醍醐が隠岐を脱出したことが語られた後に、問題の記事が現れる。『梅松論』は鏡物形式の作品であるため、本来なら語り手の発言としてカギカッコで括弧れるところである。以下、とくに断らない限り、引用は京大本による<sup>(5)</sup>。

既ニ此事風聞之間、先山陽山陰両道十六ヶ国ノ軍士等悉皆君ノ御方ニ參ズ。併天ノ与ルトゾ覺シ。伝聞越王勾踐ノ軍破テ呉王ノ為ニトラハレシカ共、智臣范蠡ガ謀ラメグラシ、圍困ヲ通シ、会稽ニ戦テ呉ヲ亡ス。偏ニ范蠡ガ遠慮ニヨレリ。呉王夫差ノ亡ケルハ、忠臣吾子胥ガイサメゴトラ不用故也。然ニ君今度隠岐ヲ出給事ハ、智臣謀ニ非ズ。只正ク天ノ与ル所也。

「会稽ニ戦テ呉ヲ亡ス」とあるが、勾踐が夫差を追い詰めて勝利した場所は姑蘇山であったと伝えられている。よく知られているように、会稽とは勾踐が敗北を喫した地である。同じ誤りは学習院大学本『平治物語』下巻にも見られ、興味深い現象であるのだが、いまはさて措こう<sup>(6)</sup>。ここで注目したいのは引用文の後半である。『梅松論』は范蠡の深謀遠慮を称え、勾踐の復権をその「謀」の賜物として捉えている。それ自体は何の問題もない。ところが引き続き、逆接語「然ニ」を冠したうえで、後醍醐天皇の復権を「智臣謀ニ非ズ。只正ク天ノ与ル所」であったと説いているために、きわめて大きな問題が浮上してくる。もし『梅松論』の主張が正しいとするならば、「智臣謀」が役立ったか否かという点で、かつ「天ノ与ル所」であったか否かという点で、勾踐と後醍醐とは重なり合わなくなってしまうからである。

そもそも、本筋とは異質の先例が歴史叙述の中に引かれることは、必ずしも珍しくはない。ただしその場合は、異質といっても、反転の例となつてることが多いようだ。『太平記』巻十一「五大院右衛門宗繁事」には、亡き主君への忠節を枉げなかつた程嬰や予譲を想起することにより、北条高時の遺児を敵に差し出した宗繁に対して批判的な目をむける記述がある。また、卷三十二の虞舜至孝説話は、孝という観点において対極に位置する足利直冬への批判

に寄与するものである。同じ手法による故事利用は『平家物語』にも見られ、巻五「都遷」では、巨費の投じられた福原京と堯代の質素な宮殿とが対比され、巻九「樋口被討罰」では、都を一時制圧した義仲と、占領の功を項羽に譲った漢高祖とが対比されている。これらは言うなれば、同じ座標軸上の正と負に分かたれるものである。

他方、『梅松論』の呉越合戦記事は、合致例でもなければ反転例でもない。故事の説く《智臣による勝利》と本筋の《天命による勝利》とは、似て非なるものとして取り上げられているのである。これは『梅松論』の独断専行である。原拠たる『史記』には、夫差を赦そうとした勾踐にむかって、范蠡が「越の勝利は天が与えたものであり、逆らってはならない」と諫止する場面がある。《天命》の介在を認めるのが本来的であることは明白だろう。

勾踐不<sub>レ</sub>忍<sub>欲</sub>許<sub>之</sub>。范蠡曰、「会稽之事天以<sub>レ</sub>越賜<sub>レ</sub>呉、呉不<sub>レ</sub>取。今天以<sub>レ</sub>呉賜<sub>レ</sub>越、越其可<sub>レ</sub>逆<sub>天</sub>乎。」

『太平記』はこれを受けているからこそ、引用説話中の范蠡に「今還て天越に呉を与たり。取こと無は越復如此の害に可逢なり」と語らせるのであり、また、児島高德をして「天莫<sub>レ</sub>冗<sub>二</sub>勾踐<sub>一</sub>」という詩句を書かせるのである。はたして梅松論作者は、こうした故事理解を知らなかったのだろうか。仮に知っていながら《天命》を否定したのだとすれば、重なり合うべき二人の王のあいだに、意図的に懸隔を設けているということになる。そして、もし知らなかったのだとすれば、梅松論作者は最初から両者を別種のものとして捉えていたことになるだろう。同一座標軸上にあることを認識しつつ、その違いを示そうとしたことになるわけである。いずれであるにせよ、『梅松論』が作中に呉越合戦記事を取り込んだのは、『太平記』のごとく本筋の展開に棹さすためではなかったと考えられる。本筋と故事とが結合しないことを堂々と宣言するこの記述の裏に、いかなる意図が潜んでいるのかについては、本稿の最後で述べることにしたい。

## 三 「異朝」との心理的距離

『梅松論』の中には、引用の必然性が疑われる中国故事が他にも見られる。後醍醐天皇が隠岐を脱出する際、舟を操る者にむかつて釣り舟を装うことを提案するくだりは、最もわかりやすい例だろう。

直勅シテ宣ク、「汝敵ノ舟ヲ恐ル、事ナカレ。急ギコギ向テツリヲタルベシ。伝聞異朝ノ大公望ハ渭水ニ釣ラシテ文王ノ車ノ右ニ乗テカヘリキ。努々恐事ナカレ」ト云々。

後醍醐は先蹤として太公望の故事に言及している。だが周知のように、これは周の文王が智臣を得た話であつて、断じて敵の追尾をかわす話などではない。その意味では、きわめて杜撰な故事利用と言わざるを得ないだろう。天理本『梅松論』において当該故事が削除されているのも領けるところである。前節の呉越合戦記事およびこの事例から帰納するに、本来の『梅松論』は中国故事の引勸を行うに際し、対象の内容を吟味して巧みに重ね合わせていこうとする積極性を欠いているように思われる。

そこでさらに視野を広げていくと、故事との共鳴を中途半端に投げ出している事例が複数存在していることに気づく。まずは上巻末尾の一節、建武三年正月の合戦によつて内裏が焼亡したことを伝える記述を引用する。

伝聞秦ノ戦破テ楚漢両軍漢陽宮ノ阿房宮室ヲホロボシケル事ハ異朝ノ事ナレバ、思ヤル計ナリ。寿永三年ノ平家ノ都落モ加様ヤト哀也。

『梅松論』は「加様ヤ」という表現を用いることで、建武内乱と『平家物語』の世界とを結び付けている。では、先に置かれた中国故事との関係はどうだろうか。一見すると、秦の阿房宮の焼亡はここで例証の機能を果たしているように読めなくもない。だが、「思ヒヤル計ナリ」の「ばかり」が醸し出すニュアンスは微妙だ。これはへ異朝の出来

事なのだから、想像することしかできない、正確には知り得ない」と言っているのに等しいのではないか。秦朝滅亡の悲惨さのレベルが判然としない以上、はたしてそれが類例となり得るのか——同程度の破滅であったのか、それとも比べものにならないほど恐ろしい破滅であったのか——、最終的な判断は棚上げにせざるを得なくなるのである。『梅松論』が引き続き寿永の平家都落ちを取り上げているのは、あたかも仕切り直しといった感がある。

一方、『太平記』は同じ比較をする際、『梅松論』が踏みとどまった一線を越えてしまっている。建武内乱の被害がいかに烈しかったかを伝えようとすると、当て推量によって、秦朝滅亡における破壊規模の方を格下に位置づけているのである。卷十四「長年帰京事付大裏炎上事」には次のように記されている。

猛火大裏にかゝりて、前殿・後宮・諸司八省・三十六殿・十二門、指も大廈の構、徒に一時の灰燼と成にけり。越王呉をほろぼして姑蘇城一片の煙となり、項羽秦をかたむけて、咸陽宮三月の火を盛にせし、呉越・秦楚の古も、是には余も不遇と、浅増かりし世間なり。

三箇月も燃え続けた咸陽宮の有様が、このときの内裏炎上に劣るといふのは、文面どおりには受け取れまい。言説上の誇張に過ぎないことは明らかである。それでも、あえてこのような形で中国故事を利用するのが『太平記』なのだ。『梅松論』が表明しているような隔たりの感覚など、そこには微塵もなかったのではないだろうか。現に、『太平記』の随所で故事が引き合いに出されるとき、右の傍線部「これにはよも過ぎじ」以外にも、「……に異ならず」「かくやと覚えて」「……に相似たり」などの言い回しが頻繁に用いられている。それぞれ一例ずつ挙げておこう。

卷三「官方敗北事」 俄事にて網代興たにも無かりければ、張輿の恠気なるに扶乗まひらせて、先南都内山え入たてまつる。只殷湯夏台に囚れ、越王会稽に降し昔の夢に異ならず。これを聞見る人ごとに袖を絞らぬは無かりけり。

卷三十四「畠山入道々誓上洛事」 其外の大名も一勢々々分て、或は同毛の鎧冑着て五百騎、千騎打もあり。或は四尺五尺の白太刀に、虎皮の尻鞆引こみ、一様に二振帯副て、百騎、二百騎打もあり。只孟嘗君が三千の客悉玉履をはきて、春信が富を

あざむきしも、角哉と覺て目紋なり。

卷三十八「相模守清氏討死事付西長尾城落事」備前国飽浦薩摩權守、宮方に一味して海上に推浮び、小笠原美濃守、清氏に同心して海道を差塞ける間、右馬頭の兵は日々に減じて落ゆき、相模守の勢は国々に遍く充滿す。魏将司馬仲達が、蜀の討手にむかひ、鬪はで勝ことを得たりけん、其謀に相似たり。

「異ならず」型の例は、ほかに卷十四「聖主都落事付勅使河原自害事」や卷三十六「頓宮四郎心易事付清氏參南帝事」にも存在する。また「かくやと覺えて」型については、卷九「六波羅合戦事付平氏没落事」、卷七「吉野城合戦事」、卷三十二「神南合戦事」に、「相似たり」型については、卷二十七「執事兄弟奢侈悪行事」などに用例が見られる。増田欣氏の調査によると、こういった表現は、古活字本においては都合三十八例が計上されるという<sup>(8)</sup>。本朝内乱史の一齣と中国故事とは、『太平記』の中でこのように結合を繰り返している。それがこの作品の性格の一面を形づくっているといえよう。ちなみに、中国と日本とを結びつける叙述は、『平家物語』にも数多く見出せるが、ここでは一例だけ挙げておきたい。

強呉忽にほろびて、姑蘇台の露荆棘にうつり、暴秦すでに衰て、咸陽宮の煙へいけいをかくしけんも、かくやおぼえて哀也<sup>(9)</sup>。

覚一本の卷七「聖主臨幸」の一節である。『和漢朗詠集』「故宮」の詩句を換骨奪胎したものであり、ゆえに呉の姑蘇台をも取り上げているわけであるが、咸陽宮滅亡と平家都落ちとを比べているという意味では、前掲の『梅松論』の記事との関係が気になるところである。『梅松論』はこの「聖主臨幸」をふまえながら、しかし「かくやおぼえて」(延慶本「是ニハスギジ」)には引きずられることなく、建武三年正月の内裏炎上を描き出したのではないだろうか。

さて、『梅松論』における、想像することしかできない「異朝」、正確には把握できない「異朝」という認識は、次

に挙げる箇所からも窺える。下巻のはじめ、天皇方の結城親光が討ち取られる場面である。

大友ハ目ノ上ヲヨコサマニ切ラレタリケルガ、大事ノ手ナリケレバ、ハチマキニテ頭ヲカラゲ興ニノテ親光ガ頸ヲ持參ス。事ノ体誠ニユ、シクゾ見エシ。樊於期予讓ナドガ振舞ハ異朝ノ事ナレバ又類モアリツラン、親光ガ最後ノフルマイ譜代ノ勇士勿論也トイヘドモ、今更哀也シ事也。

『梅松論』は復讐に命をかけた樊於期と予讓を取り上げているのだが、親光との類似性が積極的に打ち出されている印象は薄い。主君の仇の趙襄子を狙い続けた予讓はともかく、一族の仇をうつために自分の首級を荊軻に託した樊於期の伝記が、親光の先例として適切でないことは自明だろう。大友が親光の首級を持ち運んだことから連想したものと思われるが、二人は敵同士であって、樊於期の故事とはまったく趣を異にしている。天理本において削除された所以かと推測される。そうした故事までもが引かれていることから、右の記事で最重要視されているのは、じつは故事の内実ではないという可能性が生じてくる。むしろここは、「類モアリツラン」とされる中国の壮士たちに対し、結城親光が日本史上ひとり傑出していることを説こうとしているのではないか。それぞれの国内における類例の多寡を比べることこそが本旨なのではないか。『梅松論』はその際に、前述の例と同様、やはり「異朝」に対する非断定的な口調を選び取り、「異朝のことだから、他にもいろいろ例はあるのだろう」といつているわけである<sup>20</sup>。

「異朝」の話題に深く立ち入らない態度は、上下巻にそれぞれ記載される將軍論の中にも見えている。まずは上巻から引用しよう。

和漢共ニ將軍ト申ハ、朝敵ヲ討武將ノ職也。サレバ異朝、秦ノ將軍ハ白起、漢ノ將軍ハ韓信、司馬尚書、蜀ノ將ハ諸葛亮、唐ノ將ハ李請李愔、呉ノ將ハ孫臍、魏ハ呉起、燕ハ樂毅、是等也。日本ノ事ハ誰モ皆知ル所也。少ハ申ベシ。其中ニ征夷將軍、鎮守府將軍ハ勅ヲ蒙ラザルモ多シ。是ハ戰功アル時將軍トセウスル所也。一先人王十二代景行天皇御宇、東夷謀ス。御子日本

武尊ヲ以テ大將トシテ征伐シ給フ。同十五代神宮皇后自ラ將軍トシテ諏訪住吉二神ト相伴ヒ給テ、韓ヲ平ゲ給フ。同卅二代用明天皇ノ御宇、厩戸ノ太子ハ、自將軍トシテ守屋大臣ヲ誅給フ。同卅九代天智天皇ハ大職冠鎌足ヲ以テ入鹿ノ大臣ヲ誅給フ。同四十代天武天皇ハ自大將トシテ、大友皇子ヲ討。清見原ノ天皇是也。同四十五代聖武天皇ハ大野東人ヲ以テ大將トシテ、右近衛少將兼大宰大式藤原広嗣ヲ被討。松浦ノ鏡明神是也。同四十六代称徳天皇女帝、中納言兼鎮守府將軍坂上田原丸ヲ以テ大將軍トシテ、淡路廢帝并与党藤原仲丸ヲ誅伐セラル。惠美押勝ト号ス。同五十代桓武天皇平氏祖、中納言兼鎮守府將軍坂上ノ田村丸ヲツカハシテ、奥州夷狄赤髮已下ノ凶賊ヲ平ゲラル。同五十二代嵯峨天皇ハ、鎮守府將軍坂上錦丸ヲ以テ、右近衛督藤原仲成ヲ誅セラル。同六十一代朱雀院ハ、平兼盛并藤原秀郷兩將軍ヲ以テ、平將門ヲ討タル。同七十代後冷泉院御宇、永承年中、陸奥守源頼義ヲ以、安部貞任等ヲ平ゲラル。同七十二代白川院御宇、永保年中、陸奥守兼鎮守府將軍源義家ヲ以テ、清原武衡ヲ誅セラル。(以下略)

あえて長々と掲出したのは、二つの国の將軍がそれぞれのように扱われているか、その歴然たる格差を直截的に示すためである。傍線を付した通り、中国の將軍はわずかに王朝名と名前とが記されるに過ぎない。『史記』「白起王翦列伝」「淮陰侯列伝」「孫子呉起列伝」「楽毅列伝」などの主人公たちであるから、皆それなりの武勇伝を有しているというのに、そうした要素には一切関心が払われていない。一方、日本の將軍はといえば、当人の名前のみならず、当時在位していた天皇の名や、征伐した相手の名前までもが詳しく書き込まれている。しかも、聖徳太子や天武天皇など、あまり將軍と呼ばれないような人物までもが含まれている。明らかに本朝史解説は過剰である。続いて下巻の將軍論を取り上げよう。上巻の場合は語り手の言であつたが、こちらは夢窓疎石の発言の中に見えるものである。

殊ニ將軍ハ君ヲ守リ国ノ乱ヲ治ル職也。ヲボロゲノ事ニ非ズ。異朝ノ事ハラク。田村利仁頼光保昌、異賊ヲ退治ストイヘ共、  
威勢国ニ及ズ。治承以来右幕下頼朝、征夷大將軍ノ職ヲカネ、武家政務ヲ自專シ、賞罰私ナストイヘ共、罰ノカラキ故ニ、仁

ノカケタルカト見ユ。今征夷大將軍尊氏ハ、仁徳ヲカネ給上ニ、三ノ大ナル徳マシマス也。

ここで「異朝」への言及を止めている点は象徴的といえよう。上巻との重複を避けた結果かとも思われるが、それならば、日本国内の先例についても同じ対応が取られるはずである。にもかかわらず、『梅松論』は「利仁頼光保昌」の名を挙げて、これらが將軍の条件「国ノ乱ヲ治ル」を満たしていないことをわざわざ確認し、結果的に先例「右幕下頼朝」の存在を浮かび上がらせている。本朝の歴史に多くの関心を寄せるといふ基本的態度は、上巻から一貫しているといつてよい。下巻の終局部には次のような例もある。

唐堯虞舜ハ異朝ノコトナレバ是非ニ及バズ、末代ニモカ、ル將軍ニ生逢奉ルゾ、万民ノ幸ナル。

「異朝ノ事ナレバ」「異朝ノ事ハ」という言い回しには、中国と日本とのあいだに線を引こうとする意識が透かし見えるのではないだろうか。中国故事は所詮「異」なる国の出来事なのだ。前節で論じた呉越合戦故事の扱いは、そうした意識とも関わっていると思われる。

#### 四 おわりに

以上、『梅松論』が中国故事との完全なる類比を目指していない事例について論じてきた。しかしながら、こうした態度は作品内において徹底されているわけではない。じつは『太平記』同様の故事利用例も二箇所存在している。一つは、隠岐に護送される後醍醐の様子を「昔ノ須磨ノネザメ、異朝ノ王昭君ガ胡地ニ趣ケル馬上ノ思、何モ思召ノコス方モナシ」と述べるところであり、もう一つは將軍兄弟から餞別を贈られた少弐頼尚を「頼尚故郷へ錦ノ袴ヲキテ帰シハ、異朝ノ朱買臣ヨリ以来、太宰少弐藤原ノ頼尚ニテゾアリシ」と称えるところである。前者において王昭君が光源氏よりも後回しにされている点は、中国への関心がそれほど高くないことを物語るのかもしれないが<sup>(2)</sup>、

ともあれ、かかる二例が存在する以上、類比が意識的に抑制されていたという短絡的な推定は、言下に否定しておくなければなるまい。もとより意識的であるなら、呉越合戦にしろ、咸陽宮滅亡にしろ、最初から話題になどしないはずである。

それでもなお、『太平記』と比べた場合、中国への関心が薄いことは確かである。では、なぜ『梅松論』は中国故事を引用するのか。おそらくは、『平家物語』や『太平記』をはじめとする軍記物語の特性に引きずられていたからだろう。「祇園精舎」の「遠く異朝をとぶらへば（中略）近く本朝をうかぶに」に代表されるように、内乱を語る文学にとって、「異朝」への眼差しをもつことは、いわば約束事であった。ただ、そこには温度差があったということとを、『梅松論』はありありと示している。重なるはずのものを重ねずにおくというその志向は、『源平盛衰記』の故事引用態度<sup>28</sup>とは対照的といつてよいだろう。

別稿でも論じたように<sup>29</sup>、『梅松論』の熱い眼差しは、むしろ本朝の將軍史に向けられていた。とくに源頼朝に集約される治承寿永合戦への関心には並々ならぬものがある。中国への眼差しは反比例のごとく勢いを減じてしまったのではないか。それはときに「異朝」軽視にまで傾いていってしまう。上巻の日本皇統解説の後には、こう記されている。

伝聞異朝夏代ヨリ大元ニ至マデ代ノ号十五世也。是ハ面々其孫葉一流ノ惣称也。我朝ハ王孫一流御治世ヨリ外他ノ位ヲマジエズ、誠ニ神国宝祚長久ノ堺也。

王朝が次々と代わって十五世にも及んだ「異朝」に対し、日本は「宝祚長久ノ堺」であるとしている。『神皇正統記』の冒頭部や後嵯峨紀の一節にも通じるような、強い自負心が窺える。また、下巻の足利將軍礼賛記事には、

サレバ天道ハ慈悲ト賢トヲ加護スベキ間、両将ノ御代ハ周ノ八百余歳ヲ超過シ、アリソ海ノ浜ノ砂ナリトモ、此將軍ノ御子孫

続タモ子給ベキ御代ノ数ニハ争カ可及。

とある。「周ノ八百余歳」ですら、足利將軍の前では踏み台にされている。ここで注意されるのは、「天道」が將軍の繁栄をもたらすと明記されている点である。先に見たように、『梅松論』は呉越合戦故事においても『天命』を除去し（もしくは補填せず）、そのことによって、後醍醐還幸の側のみが『天命』によるものであることを際立たせていた。本筋と結合しない屈折した呉越合戦故事は、じつは作中における絶対者「天」の力を印象づけるためのものだったことが見えてくるだろう。そうした意図のもとで、「異朝」との心理的距離にも左右されつつ、『梅松論』は二人の王の共鳴を切り捨てる道を選び取ったのである。

註(1) 増田欣氏『『太平記』の比較文学的研究』（角川書店、一九七六年）二六七頁参照。

(2) 引用は『神宮徴古館本太平記』（和泉書院）による。ただし、適宜濁音や通行字体に書き換え、一部ルビ等を省略した。他の資料を引用する場合も、同じく表記を私に改めたところがある。

(3) 西源院本は故事説話の引用の直後に、「今木三郎高德此事ヲ思ナズラヘテ一句十字ノ詩二千般之思ヲ述テ竊ニ叡聞ニ達シタル智慮ノ程コソ浅カラネ」と記す。

(4) 釜田喜三郎氏『太平記研究——民族文芸の論——』（新典社、一九九二年）二二四頁、前掲(1)増田氏著書二六八頁、および、山田尚子氏「拡大する范蠡像——商人と釣翁——」（和漢比較文学）三一、二〇〇三年八月）参照。魚腹密書説が日本で生まれてきた背景にあったものとして、『列仙伝』『百詠和歌』『宇治拾遺物語』などが指摘されている。

(5) 前掲(4)釜田氏著書二二四頁参照。

(6) 引用は東京大学国語研究室のマイクロフィルムによる。『和漢朗詠集古注釈集成第二卷上』（大学堂書店）の解題では、この朗詠注（東大本甲）は書陵部本系に分類されている。

(7) 『和漢朗詠集古注釈集成第二卷上』一五頁によれば、「書陵部本系諸本に『大江注』などとして引かれる江注は、実は江注系ではなく、見聞系のことである」という。ただし、見聞系は完本が少なく、魚腹密書説の存在は確認できない。なお、

- 六地藏寺蔵『和漢朗詠集注』の一本にも魚腹密書説が見えるが、そちらでは単に「注二八」として紹介される。
- (8) 魚腹密書の詩句の形成については、前掲(1)増田氏著書二六七頁に論じられている。もとは大夫種の言葉であったものが整えられたと考えられる。
- (9) 西施の素性は『呉越春秋』によれば「鬻薪女」であったといい、最初から呉国に送り込まれるために召し出されたことになっている。
- (10) 引用は国立歴史民俗博物館所蔵本の影印(汲古書院)による。
- (11) 引用は『和漢朗詠集古注釈集成第三卷』による。
- (12) 『史記』によれば出奔後の范蠡は財をなすのだが、日本の文献はそうした利殖家としての側面をあまり描かないようである。前掲(4)山田氏論文参照。
- (13) 三田明弘氏『『太平記』巻第四「呉越闘事」と中国における呉越説話』(『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学編)』四四、一九九六年二月)は、『太平記』の勾践像が「孝子」「儒教的君子」として形象されていることを論じており、大夫種讒死記事の削除についても簡単に触れている。なお、三田氏は当該説話の末尾の「覇者盟主」という語に、勾践および後醍醐への批判の胚胎を読み取っている。
- (14) 前掲(1)の著書のなかで増田氏は、失政を犯した呉王夫差が第二部の後醍醐に重なる論じ(二七五頁)、大森北義氏『『太平記』の構想と歴史叙述——「主上還幸」から「先帝重祚」へ——』(山下宏明氏編『軍記物語の生成と表現』所収、和泉書院、一九九五年)は、説話の前口上に見える諸侯の「覇業」についての言及に、早くも後醍醐批判が内包されていると論じている。呉越合戦故事と後醍醐との関係は、このように捉え方次第でさまざまな様相を帯びてくる。
- (15) 引用は「翻刻・京大本梅松論」(『国語国文』三三一八、三三一九)による。
- (16) 天理本『梅松論』が「会稽ノ恥ヲ雪メテ」と書き換えていることを付言しておく。
- (17) 梅松論作者は原太平記を見ていた可能性が高い。小秋元段氏『太平記・梅松論の研究』(汲古書院、二〇〇五年)第四部第三章参照。
- (18) 前掲(1)増田氏著書五六―五七頁参照。
- (19) 引用は日本古典文学大系(岩波書店)による。

- (20) 流布本『梅松論』は「遙に聞ばかりなり」とする。
- (21) 『太平記』において二国の人物や出来事が並記される場合、きまつて中国側が先に置かれる。
- (22) 松尾葦江氏「源平盛衰記と説話——方法としての説話——」（『説話論集第二集・説話と軍記物語』所収、清文堂出版、一九九二年）参照。
- (23) 拙稿「征夷大將軍の系譜——『梅松論』における頼朝と尊氏——」（『人文論究』五五―四、二〇〇六年二月）参照。
- 〔付記〕 東京大学国語研究室より資料の翻刻掲載の許可を賜った。この場を借りて謝意を表す。

（きたむら まさゆき・関西学院大学文学部専任講師）